

令和5年度「教師の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」

(1) 高い資質能力を有する教師の確保に関する調査研究

テーマ4: 教師不足をはじめとした教師の人材確保に関する近年の課題への対応

～『教師の仕事』発信の取組支援～

成果報告書



国立大学法人福岡教育大学

目次

I 本調査研究の概要	3
1 主題と企画の概要	3
2 実施体制	3
3 課題認識	3
4 調査研究の目的	4
5 調査研究の成果目標	4
6 調査研究の具体的な内容・取組方法	4
7 調査研究の実施概要	6
II 取組の実際	6
1 学内定例交流イベント	6
2 特別企画交流イベント	7
（1）附属小学校の教育実習担当者との交流	
（2）教員採用試験担当者との交流	
（3）本学を卒業した1年目教員との交流	
（4）小学校教員を目指す他大学の学生との交流	
（5）教育大進学に関心のある高校生との交流	
（6）山間部の小学生との交流	
3 「教師の魅力再発見！」公開フォーラム	16
（1）プロジェクト活動報告	
（2）パネルディスカッション	
4 学生ボランティアの活動	20
5 「教師の魅力再発見！」ショートムービー集	21
III 本調査研究の総括と今後の展望	22
1 取組の成果	22
2 取組の課題	24
3 今後の展望	25

I 本調査研究の概要

1 主題と企画の概要

(1) 主題

教師の魅力向上につながる学生支援プロジェクト

(2) 企画の概要

昨今、特に小学校において教員志望者の減少に伴う優秀な人材確保が課題となっていることから、本学初等教育教員養成課程の学生を対象に、学生同士が教職について語り合う場や、教職を志す高校生、本学出身の若年教員、教育実習を行う附属小学校の教員、県教委の教員採用担当者等との交流の場をつくり、その成果として教師という仕事の魅力をフォーラムや動画等で広く発信することで、学生が教職に就くことへの関心や意欲を高めることができるよう支援する。

福岡県教員採用試験（小学校）受験者数の推移

	受験者数	合格者数	倍率
平成21年度	952	128	7.4
平成22年度	1045	126	8.3
平成23年度	1131	196	5.7
平成24年度	1156	294	3.9
平成25年度	1205	308	3.9
平成26年度	1187	320	3.7
平成27年度	1198	376	3.2
平成28年度	1140	391	2.9
平成29年度	1205	579	2.1
平成30年度	1295	827	1.6
平成31年度	892	671	1.3
令和2年度	951	661	1.4
令和3年度	865	616	1.4
令和4年度	725	570	1.3
令和5年度	857	629	1.4

2 実施体制

所属部署・職名	氏名	役割分担
教育総合研究所 所長	清水紀宏	研究プロジェクト全体の統括
教育総合研究所 准教授	高良祐治	研究プロジェクトの企画、連携調整、運営
教育心理研究ユニット 教授	生田淳一	研究プロジェクト成果の評価、分析
経営政策課 主査	時津隆史	学内外への広報
学生支援課 主査	有須田和哉	学生への周知
連携推進課 主査	有吉美里	契約事務及び経費管理
連携推進課 課員	玉井亜実	契約事務及び経費管理
福岡教育大学附属3小学校		教育実習に係る情報提供、交流調整
福岡県教育庁教育総務部教職員課		教員採用に係る情報提供、交流調整
福岡県教育庁教育振興部高校教育課		交流希望の高校との連絡調整
各市町村教育委員会		若年教員との交流に係る連絡調整

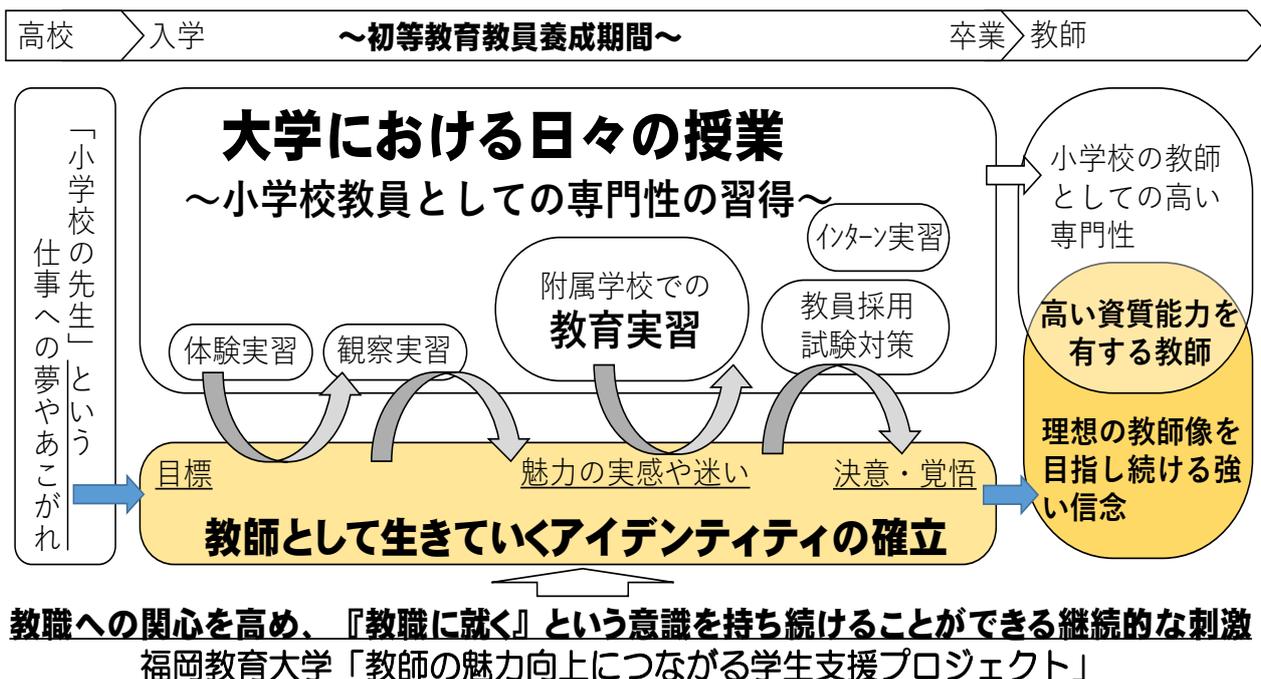
3 課題認識

昨今、教育現場では業務の多忙化・多様化や病気休職、早期離職が増加し、教職に対するマイナスイメージが広がっており、これに伴って教員志望者の減少及び採用試験倍率の低下が特に小学校で顕著となっている。特に本学に在籍している学生の多くが九州出身であるが、九州各県の小学校教員採用試験倍率は全国的に見てもかなり低く、危機的状况であるといえる。この様な状況で採用された教員の中には、採用後早期に学校現場に適応できずに課題を抱える若年教員もおり、これらは、教育の質の低下につながる事が懸念される。

以上のことから、学生にとって教師という仕事に対する魅力を向上させ、学生がより主体的に教師を目指すことができるようにすることは、喫緊の課題であるとする。

4 調査研究の目的

学生が小学校教員の魅力を知り、より主体的に教師を目指すことができるようにするために、初等教育教員養成課程の学生を対象に、これまで本学が取り組んできた教職課程の学びや採用試験に向けた支援事業に加え、新たに教職への関心を高め、「教職に就く」という意識を強く持ち続けることができる取組を企画、実施、評価することで、主体的な教師志望者の育成に向けた取組の在り方を究明する。



5 調査研究の成果目標

- 本学の初等教育教員養成課程（各学年約 380 名）の参加希望学生を対象とした少人数交流イベント形式の場を小学校の教員を志すことに関するテーマで 2 0 回程度設定する。前年度、1 年生を対象に試行的に 7 回の交流イベントを実施し、10.6%の参加であったため、本年度は対象を 1，2 年生に広げ、25 %以上の学生の参加を目指す。
- 交流の様子を SNS や学内のモニター、広報誌等で情報発信するとともに、各交流の中で得られた学生が感じた『教師の仕事』の魅力について提案、交流するフォーラムを全学対象に開催する。
- 本プロジェクトを通して得られた『教師の仕事』の魅力については、動画等の形式で教員養成系学部を有する大学がいつでも閲覧できるように広く発信する。
- 現在 7 0 %台の小学校教員採用試験出願率を 8 0 %以上にすることを旨とする。

6 調査研究の具体的な内容・取組方法

- (1) プロジェクトの起ち上げ

採用試験出願者の減少、倍率の低下が顕著な小学校に絞って調査研究を実施することとし、本学の初等教育教員養成課程の学生を対象に、『教師の仕事』の魅力についての理解を深め、主体的に教師を目指そうとする意識を高く持ち続けることができる取組を企画、運営するプロジェクトを本学の教育総合研究所を中心に立ち上げる。

(2) 学外との連携、調整

- 『教師の仕事』への理解や教員採用試験への関心を高めるために、福岡県教育庁教育総務部教職員課との連携を図る。また、教職を志す思いを再認識し、初心を思い出させるために、教育大学への進学を希望している高校生との交流を福岡県教育庁教育振興部高校教育課に依頼する。
- 学生が自身の将来像をつくる参考とできるように本学出身の若年教員との交流を実施するため、対象の市町村教育委員会や在籍小学校との連携を図る。
- 3年次に実施される教育実習への不安を払拭し、期待を高めるために、本学附属の3つの小学校の教育実習担当者と学生が交流できるよう調整を行う。
- 他の教員養成系学部を有する大学と連携し、同じ小学校教員を志す学生同士の交流ができるように調整を行う。

(3) 交流イベントの実施

学生の交流は、学内で所属クラスの枠を超えて学生同士が教職にかかわるテーマについて少人数グループで交流を行う「学内定例交流イベント」と、(2)で記したような学外と交流を行う「特別企画交流イベント」を実施する。なお、学生の主体性を育むため、当日の進行等、運営には学生ボランティアの積極的な参加を推奨する。

○ 学内定例交流イベント

「小学校の教員を目指す理由」や「福岡教育大学を選んだ理由」など毎回1つのテーマを決めて、参加希望学生を募集し、5人程度の小グループに分かれての意見交流を行う。

○ 特別企画交流イベント

学外との連携を生かし、本学出身の若年教員、小学校の教員養成課程系大学に関心がある高校生、附属小学校の教育実習担当教員、県教員採用試験担当者、他の教員養成系大学の学生、地域の小学生等とのオンラインを活用した意見交換の場を設定する。

(4) 全学フォーラムの開催

初等教育教員養成課程の学生に広く参加を呼びかけ、各交流イベントを通して得られた『教師の仕事』についての魅力ややりがいについて、学生や各連携先の代表者が参加して提言を行うフォーラムを開催する。

(5) 成果の情報発信

毎回の交流イベントは、運営上参加可能人数に限られるため、交流の様子や参加者の感想等は学内に設置されたモニターやSNS（学生に親しみのあるX（旧Twitter）やInstagram）、大学のホームページや広報誌等で情報発信を行う。

また、各交流イベントの中で語られた『教師の仕事』の魅力については、子供の成長の実感や自分自身の達成感等、魅力を分類してショート動画を作成し、YouTubeチャンネルとして学生向けに限定公開する。このチャンネルや分類された動画のQRコード等の資料は、リーフレットを作成し、全国の教員養成系学部を有する大学にも配付する。

7 調査研究の実施概要

5月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調査研究プロジェクトの起ち上げ ※ 学内組織構築及び連携先への趣旨説明、協力依頼 ○ 学生へのプロジェクトの趣旨や参加奨励についての告知 ○ 学生ボランティアの募集
6月～12月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学内定例交流イベントを実施 ○ 特別企画交流イベント「附属小の先生と語ろう」を3つの附属小それぞれと実施 ○ 特別企画交流イベント「小学校教員を目指す高校生と語ろう」を希望する高校と実施 ○ 特別企画交流イベント「福教大卒の小学校の先生と語ろう」を実施 ○ 特別企画交流イベント「小学校教員を目指す他大学の学生と語ろう」を実施 ○ 特別企画交流イベント「教員採用試験担当者と語ろう」を実施 ※ 実施時期については、連携先との協議や学事日程等を考慮して決定 ※ 交流イベントの様子は、随時 SNS 等で公開
12月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全学フォーラムの開催
2月～3月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 『教師の仕事』の魅力動画紹介リーフレットの作成及び配付 ○ 成果報告書の作成

II 取組の実際

1 学内定例交流イベント

本学の小学校教員を育成する初等教育教員養成課程の募集人員は、計 385 名である。この各学年約 380 名程度の学生が約 27 名ずつの 14 クラスに分かれ、選択教科以外はほぼこのクラス単位で講義を受講している。このため、同じ「小学校教員を目指す」という目標を持っていながら、クラスが異なればほぼ知り合う機会がない。そこで、クラスの枠を超えて、同じ目標を持つ者同士が様々なテーマで交流することで、お互いの教師を目指す思いに共感したり、考え方を参考にしたりし、教職を志す意識をより高めることができる機会を提供することとした。具体的には、各学年で毎回テーマを設定し、参加者を異なるクラスの 3～5 名程度にグループ分けして交流を行った。



特に、入学間もない1年生にとっては、知り合いを増やすきっかけにもなったようで、はじめはやや緊張が見られても、「小学校教師を目指す」という同じ目標を持っているという共通基盤があるためか、すぐに打ち解け合うことができていた。

開催期日	対象	テーマ
4月17日(月)	1年生	あなたは どうして福教大へ？
4月25日(火)	2年生	教えて！あなたの福教大1年目の重大ニュース
5月15日(月)	1年生	あなたは どうして小学校の先生に？
12月4日(月)	2年生	ゲームをしながらテーマトーク
1月17日(水)	1年生	ゲームをしながらテーマトーク

参加者の感想

初めて出会った人でも話していると、いつの間にか同じ夢を持つ仲間として話すことができ、とても楽しかったです。自分と違った教員を目指すきっかけや楽しみなことを聞いたことで、少しですが視野が広がった気がします。

今回も時間が限られていたので、もっと色々な話を聞いてみたかったと感じました。毎回色々な方と交流ができて、すごく貴重な経験ができていますと感じています。



2 特別企画交流イベント

いつも決まった仲間といつもの教室で講義を受け、大学生生活に慣れてくると、日々の大学生生活がルーティーン化し、「自分は教師になる」という意識が薄くなることが考えられる。もちろん教職に関する講義を受講することで、専門的な知識は身に付くが、3年次の教育実習を含めて4年間で数回しかない教育現場の経験や教員採用試験の時期を除けば、教職に就くことを強く意識することは、特に1, 2年生にはなかなか難しいと考えられる。そこで、以下のような学外と連携した交流イベントを企画し、普段の大学生生活では関わる人が殆どいない人々と交流する機会を提供することで、教職に就く意識を強く持ち続けることができるよう支援を行った。

(1) 附属小学校の教育実習担当者との交流

本学には、福岡、小倉、久留米の3つの附属小中学校があり、殆どの学生がこのいずれかの附属学校で3年次に3週間の教育実習を行う(一部の学生は、協力公立学校での実習)。学生にとっては、教材研究、指導案の作成、教具の準備、児童生徒を前にした授業、授業反省会など、日常の大学生生活とは環境も内容も大きく異なる期間であり、4年間の大学生生活の中でも最も緊張する期間である。このため、実習前の学生にとっては、期待とともに大きな不安を抱えていることも考えられる。

初等教育教員養成課程の学生が、3つの附属小学校の中からどの附属小学校で教育実習を行うのか決まるのは、約1年前の2年次の5～7月頃である。そこで、この時期に合わせてそれぞれの附属小学校の教育実習担当の教員とのオンラインによる交流を企画した。

そのために、各附属小学校の副校長に本プロジェクトの趣旨を説明し、協力を依頼した上で、教育実習担当の教員と事前に打ち合わせを行った。特に、対象が2年生ということで、教育実習のイメージが殆どできていない学生であることや、実習に対して「大変そう」「きつそう」という不安が先行している状況があるので、少しでも期待が持てるような交流にしたい旨を伝えて協力を仰いだ。

当日は、どうしても指導する側とされる側であるため、初めのうちは固さも見られたが、附属小学校の先生方の協力もあり、これまでにあった実習生のエピソードや先生方自身が大学生だったときの教育実習の思い出話などで、徐々に和やかな雰囲気となり、学生からも活発な質問が相次いだ。

これまでは、漠然とした不安が先行していた教育実習に対して、計画的に進めれば先生方からの十分なサポートもあり、充実した教育実習となる見通しを持つことができた有意義な交流となったと考える。

開催期日	附属小学校	参加教育実習担当教員
5月19日(金)	福岡小学校	横田純也教諭、奥村杏奈教諭
6月14日(水)	小倉小学校	白濱太隆教諭、松岡かおり教諭
7月5日(水)	久留米小学校	伊藤将記教諭、松元瞳美教諭

参加者の感想

最初少し緊張したけど、すぐに和やかな雰囲気になって楽しかったです。内容も附小の先生の人柄や実習を充実させるコツなど、初めて知ることだらけで、得した気分になりました。楽しいおしゃべりや丁寧に質問に答えてくださったおかげで実習が少し楽しみになってきました。



(2) 教員採用試験担当者との交流

昨今、教員採用試験の倍率は低下傾向にあるとはいえ、学生にとっては、教諭となるためには教員採用試験に合格しなければならないという意識や、そのためにどのように準備を進めていけばいいのかわからないという不安が常にある。そこで、実際に教員採用試験業務に携わっている方と直接学生が交流することで、その不安を少しでも払拭し、前向きに教師を目指すきっかけになることを目的に交流イベントを企画した。

本学は、福岡県を中心に九州各県、中国四国地方からも多くの学生が就学しており、このため教員採用試験の受験先も多くの都道府県や政令市となっているが、例年約35%前後が福岡県小学校の教員採用試験を受験している。そこで、この最も受験者数が多い福岡県の教員採用試験を実施している福岡県教育委員会と連携して交流イベントを実施することとした。このことは、福岡県教育委員会としても現在全国最低レベルの受験倍率を改善する広報になることもあり、お互いに利があるという共通認識のもと実施することができた。

そこで、事前に福岡県教育庁教育総務部教職員課の人事管理主事と打合せを行い、教育実習もまだ経験していない1、2年生が対象であることや教員採用試験に対してもまだ漠然としたイメージしか持っていないことを伝え、採用試験合格のための試験対策というよりも、教師を目指すことの良さと教師という仕事の魅力、そのため今の学生生活をどのように充実させればよいかという話題で交流を進めていきたい旨を伝え、共通理解を図った。

開催期日	対象	福岡県教育委員会担当者
5月30日(火)	1, 2年生	福岡県教育庁教育総務部教職員課人事管理主事 中島正之 氏 福岡県教育庁教育総務部教職員課市町村立学校係指導主事 隅谷将光 氏

参加した学生にとっては、数年後に受験する教員採用試験を実施している人という「普通は会えない人」を目の前にし、緊張した面持ちであったが、教育委員会の担当者が元教員であることや本学出身ということもあり、学生からの質問だけでなく、担当者からも積極的に学生に話しかけていただき、和やかな雰囲気で行うことができた。



担当者からは、「自分が指導したことが、数年後数十年後に花開き、その子供の人生に少なからず影響を与えることができる、そんな崇高な仕事は教師以外にはないのではないか。」「今大学で学習していることで『なんの役に立つのだろう』という内容もあるかもしれないが、実際に教師になってみてその意味がわかる。今は日々の授業をしっかりと受けてほしい。そうすれば自然と採用試験の合格も見

えてくる。」という話もしていただき、学生が教師という仕事に対して前向きに考えることができることや採用試験に対する漠然とした不安も少し解消することにつながったのではないかと考える。

参加者の感想

貴重なお話が聞け、教採に対しての不安要素が結構解消された気がします。教採のためだけの勉強ではなく、大学の授業を大切に、学生の中に多くの経験をすることで、学んだことが子供への指導に活かされるというお話が印象に残りました。教採は私たちがふるいにかけるためのものだと思っていたけど、実際に話を聞いて考え方が180度変わりました。

(3) 本学を卒業した1年目教員との交流

教師を目指す学生にとって一番のロールモデルとなるのは、やはり実際日々子供に学習指導を行っている現職の教員である。さらにほんの少し前まで今の自分自身と同じ福岡教育大学の学生であった教員と交流する機会があれば、なおさら将来像をイメージしやすいのではと考え、本学を卒業した1年目の教員の教室をオンラインで結んで語り合う場を企画した。

このような企画は、これまでも本学の同窓会やキャリア支援室等が開催してきたが、どうしても採用試験を控えた学生に対しての対策講座のようなものであったり、受験体験発表のようなものであったりして、やや堅い雰囲気の中で行われる傾向がある。本プロジェクトはその目的から、1, 2年生を対象とした「教職への関心を高める」ことを大切にしているため、教員の学生の頃の話や実際に教師になってみての感想、日々の生活の様子など、参加学生にとって興味があるけどよく知らないことを中心に対話が進行するよう心がけた。

実施に向けては、本学の教員採用試験対策等の指導支援を行っているキャリア支援室と連携を図り、前年度卒業生の中から4人の教員を推薦していただいた。そして、所属する学校長へ連絡を取り、本プロジェクトの趣旨を説明し協力依頼を行い、本人に交流イベントへ参加協力してもらうことについて承諾を得た。

開催期日	対象	所属校	初任者氏名
12月1日(金)	1, 2年生	福岡市立三筑小学校	日野李風 教諭
		鞍手町立新延小学校	花田尚樹 教諭
		宗像市立河東小学校	森田竜成 教諭
		筑前町立三輪小学校	大村真優 教諭



当日は、インフルエンザ罹患により急遽1名が参加できず、3名の1年目教員のオンライン参加での実施となったが、年齢も近いいためか終始和やかな雰囲気で行うことができた。実際の交流の内容は、日々の子供たちとの関わりで実際にあったエピソードや他の先生方や保護者との関わり方、出退勤の時間や休みの日の過ごし方などについても話が及び、オンラインカメラで教室の様子を見せて

もらうなど、教師という仕事に対しての期待を高めることにつながったのではないかと考える。最後に、3名の先生方それぞれから実際になってみて今感じる教師の魅力について語ってもらった。「うまくいかないことの方が多いが、その中でも子供の姿で少しでも成果として返ってきたことを感じたときに教師をやっていてよかった」といったことなどを語ってもらい、参加学生の教職に就くという意欲を高めることにつながったのではないかと考える。

参加者の感想

小学校の先生として働いていらっしゃる先輩たちは、とてもきらきらして輝いて見えました。「大変だけど楽しい」「子供たちの純粋な姿に勇気づけられたり癒やされたり」と笑顔で話していらっしゃる姿を見て、ますます小学校の先生になりたいという気持ちが強くなりました。

(4) 小学校教員を目指す他大学の学生との交流

全国の教員養成を目的とする国立の大学・学部の入学定員は、11,197名であり（文部科学省調べ）、これに私立大学の学生を加えるとかなり多くの学生が教師を目指して日々学んでいるといえる。また、小学校の教員採用試験の受験者数を見ると、毎年約18,000名の新卒受験者が挑戦しており、このことから同じ目標を持って日々大学生活を送っている学生が全国にたくさんいることがわかる。しかし、日々大学に通っていると、いつも数十人の同じクラスで授業を受け、数人の同じメンバーで過ごしており、全国に同じ目標を持っている学生がいることは意識しにくい。

そこで、小学校の教員を目指している他大学の学生とオンラインで交流することで、学外にも同じ目標を持って頑張っている学生がいることを意識し、自身の教師を目指す意欲をより高めることができるのではないかと考え、教員養成学部を有する他大学に学生同士の交流を働きかけてみることにした。

① 九州女子大学との交流

福岡県には、国立教員養成大学である本学の他に、小学校一種免許を取得できる私立大学が5大学ある。そのいくつかの大学に提案をしてみたが、私立大学から見れば本学は最大のライバルであり、こちらからの働きかけへの警戒心は強かった。その中で、九州女子大学には本プロジェクトの趣旨に賛同していただき、教員養成を行う人間科学部の友納艶花学部長、人間科学部児童・幼児教育学科長の萬徳紀之学科長の協力により、10月19日（木）に実施の運びとなった。

九州女子大においても初めての試みということで今回は萬徳学科長が担当している授業の中で参加を呼びかけていただき、5名の学生が参加しての実施となった。交流では、カリキュラムの違いが話題となり、模擬授業や体験的な学習が豊富に位置づけられている私立ならではの授業が、本学の学生にとっては関心が高いようであった。



参加者の感想

カリキュラムや模擬授業等異なることも多く、刺激になりました。3年生の実習の様子を見学する観察実習を終えて、来年の本実習にすごく不安を抱えていますが、今回同じ目標を持つ仲間とお話できて、みんなと一緒に頑張ろうという気持ちになりました！

② 愛知教育大学との交流

他大学との交流を進めるために、全国の大学の広報窓口等に文書で提案を行ってみたが反応はなかった。このような新たな企画については、どのように計画するのか、どのように学生に周知するのかといった対応について、担当者を新たにつくることになるため実現へのハードルは高いと感じた。この課題について、本学の理事に相談したところ理事同士のつながりで愛知教育大学の新津勝二理事を紹介していただき、早速連絡を取ったところ、本プロジェクトの趣旨に賛同の上、キャリア教育やボランティア活動などの担当をしていらっしゃる学校教育講座の高綱睦美准教授を窓口として紹介していただいた。

高綱准教授と打合せを進める中で、愛知教育大学でも全学に参加を呼びかけることは難しいため、今回は、高綱准教授がサポートをしている学生ボランティア団体のメンバーとの交流として10月27日（金）に実施することとなった。

当日は、プレゼンテーションを用いた簡単な互いの大学紹介や自己紹介などを通じて緊張をほぐしたあと、授業や教育実習のシステムの違いや授業以外に取り組んでいる留学やボランティア活動などについて活発に交流することができた。

参加者の感想

人脈広がったなって思いました。他大学の人が留学やNPOなど色々な活動に取り組んでいることを知って刺激になりました。遠く離れた大学で、同じ小学校の先生を目指していても、その目指し方は色々あるのだと実感できたと、まだまだ頑張らなくてはと思えました。

③ 北海道教育大学との交流

九州女子大学、愛知教育大学との交流を終え、本学の学生にも交流大学の学生にも好評であったため、次の交流大学を探していたところ、本学副学長から北海道教育大学の佐々祐之副学長に本プロジェクトの活動内容を紹介していただいた。その結果、本プロジェクトに高い関心を持っていただき、実施する方向で調整を行った。北海道教育大学については、佐々副学長ご自身が本学との調整窓口となっただき、教育企画課の重川莉穂氏に学生の募集や当日の準備などをしていただき、1月19日（金）に実施できた。

これまで2回の他大学との交流では、本学の参加者が様々なクラスから応募してきた学生でありほぼ初対面であるため、固さが見られ、それが交流にも影響を及ぼしていることが感じられていたため、今回は、オンライン交流を始める30分前に集合してもらい、まずは学内でアイスブレイクとなる交流を行った。また、実際の北海道教育大学との交流では、どうしてもオンラインでの交流では積極的な発言が対面に比べると消極的になるため、「自分が“教育”大生だなと思うとき」「大学にこん



な授業があったらいいのに」など交流テーマを書いたカードを用意しておき、くじで選んでもらいながらそのテーマについて語り合えるよう工夫をした。その結果、積極的な発言や笑顔が多く見られ、これまで以上に活発な交流とすることができた。

参加者の感想

北海道というすごく遠いところでも先生になりたいという思いは変わらないことを実感できたし、自分とは違った意見もたくさん聞けて、参考になりました。同じ夢を持つ人とお話して改めて教師の素晴らしさを感じ、自分も頑張ろうという思いが強くなりました。柔らかい雰囲気ですぐ笑顔が溢れる空間だったので、緊張せず楽しく過ごせました！

(5) 教育大進学に関心のある高校生との交流

本学の学生は、推薦の一部の学生を除き、大学入学共通テストや大学が課す個別学力検査を経て入学してきている。また、多くのプログラムで面接か小論文が課せられており、本学への受験に向けて取り組んでいた頃は、「教師になる」ことについての思いも強かったことが考えられる。しかし、日々の生活の中で、ファッション等の世代の流行に夢中になったり、アルバイトやサークル活動等に熱心になったりするあまり、大学生活も単位を取ることに主眼が置かれ、「教師になる」ことについての意欲や思いがやや意識されない状況になっていることが考えられる。これは、昨今の教員採用試験の倍率（特に小学校）の低さから来る教職に就くことに対する緊張感の低下も影響しているのかもしれない。

一方、本学のオープンキャンパスには、多くの高校生が毎年訪れており、教師という仕事に関心を持っている高校生はこれまで同様多くいる。このような高校生にとっては、実際に教育大学で学んでいる学生と直接交流ができることは、進路選択の参考となり、進学への意欲向上にもつながると考えられる。また、このような高校生と学生が交流することは、本学学生にとっても少し前の自分が高校生だったときの「どうしても教師になりたい。そのために教育大に入りたい。」と思っていた頃を思い出すきっかけにもなり、改めて「教師になる」ことへの意欲を高めることにつながると考えた。

そこで、福岡県教育庁教育振興部高校教育課を訪問し、本プロジェクトの趣旨を説明した上で、協力を依頼した。その後、高校教育課において内容を検討し、県立高校に本プロジェクトを紹介したところ、以下の5校が参加希望をしているとの連絡があり、早速各高校を訪問し、改めて趣旨の説明や交流の形態、交流の進め方などの説明を行った。その後、各高校と日程調整を行ったり、オンライン交流の環境確認を進めたりしながら、それぞれの交流を実現することができた。なお、本学からの参加者は、できるだけ高校生と年齢が近く、受験の記憶が鮮明な大学1年生とした。

開催期日	対象	高校名	高校の参加者
10月13日（金）	1年生	福岡県立新宮高等学校	6名
10月24日（火）		福岡県立鞍手高等学校	11名
10月31日（火）		福岡県立春日高等学校	17名
11月14日（火）		福岡県立京都高等学校	41名
12月14日（木）		福岡県立朝倉高等学校	4名

実際の交流の内容は、参加した高校生の学年や立場によって異なる傾向が見られた。進路を本学に決め、受験を控えた3年生は、2次試験の小論文や面接に向けた対策や受験当日の様子について関心が高く、教育大に関心を持ち始めている1、2年生は、学生が教師を目指した理由や大学の授業の様子、一人暮らしやアルバイトやサークル活動の様子などに関心が高いようであった。高校生との交流



は、どうしても高校生から大学生への質問に対して、回答していく展開が中心となったが、その中で、学生にとっても自身が高校生の時、未知の大学受験や大学生活に不安や期待を抱えていたことを思い出し、改めて教師を目指す思いを強くするきっかけになったと考える。

参加学生の感想

半年前までは私も高校生。制服姿が懐かしかった！私が高校生の時は大学のイメージがあまり持てなかったのですが、このイベントで大学について知ることができるのは高校生にとって貴重な時間だと思いました。

高校生の時は不安だったけど、大学生になってみるとそこまで気にすることではなかったことが多かったのですが、それを高校生に伝えられればと思い参加しました。少しでも役に立っていればいいな。

参加高校生の感想

前から教師になりたいと思っていただけ、進路を決める今になって本当にそれでいいのかと考えています。改めて自分と向き合ういい機会になりました。まだ決心できていないけど前向きに考えてみようと思います。

実際に教師を目指し、大学受験も経験した先輩方の話を直接聞くことができ、とても有意義な時間で、いい経験になりました。いただいたアドバイスを学校生活で活かしていきます。そして福教大に合格して先輩方の後輩になれるよう頑張ります！

(6) 山間部の小学生との交流

将来小学校の教師を志す学生にとって、小学生との交流は自身の適性を見極めつつ、目標を意識化することにつながっている。このため、近隣の小学校に学習ボランティア等で継続的に訪問している学生も多い。一方で、離島や山間部の小学校など交通手段が限られる学生にとっては訪問することが難しい地域の子供たちとは交流する機会が限られている現状がある。

しかし、令和2年度末から実施されたGIGAスクール構想によって整備された高速大容量の通信ネットワークの実現は、山間部や離島など僻地の学校との交流も容易にした。そこで本年度は試行的に山間部にある小学校とオンラインで交流を実施してみることとした。これは、学生にとって学内に居ながら小学生と交流できるという貴重な機会となるとともに、これまで学生ボランティアなどが訪問しづらかった小学校にとっても今後の可能性を広げることになると考えた。

今回交流先とした新宮町立立花小学校は、立花山の中腹にある小学校で、各学年単学級の小学校である。新宮町は福岡市に接しており、中心部は近年ベッドタウンとして人口増加が著しい地域であるが、立花小学校は最寄りの駅から遠く、これまで学生ボランティアも殆ど訪問したことがない小学校である。そこで、安部憲司校長に本プロジェクトや今回の交流の趣旨や意義を説明したところ、賛同していただき、今回は7月13日（木）に5年生との交流を実施することとなった。

立花小学校5年生の担任である近藤潤一先生と打合せを進める中で、オンラインの画面越しで学生と小学生が活発に交流するための方法について協議を行った結果、3つの少人数グループに分かれ、以下のような簡単なゲームを行いながら交流を行うこととした。

ゲーム名	ゲームの内容
リコーダージェスチャー	一方に提示された曲を、楽譜無しですぐにイメージでリコーダー演奏し、相手側が何という曲かを当てる。
〇〇といえば？クイズ	「〇〇といえば？」で連想される物事を1人1人が画用紙に記述し、他と同じワードを記述していれば加点。設定されたNGワードを記述していれば減点。
似顔絵コンテスト	指定された誰もが知っているキャラクターを資料無しで画用紙に描き、「似ている」「面白い」等でポイントを加算する。

当日は、多くの学生が参加し、交流を楽しむことができた。もともと小学校の先生を目指す学生であるため、子供たちとの交流も画面越しであるとはいえ、はじめから積極的に関わることができ、小学生にとっても優しいお兄さんお姉さんとの交流という感じで、賑やかな交流となった。

本年度は小学生との交流はこの1回となったが、僻地の小学校にとっては対面では難しい外部との交流の解決策の一つとなり得るし、本学にとっても教育実習以外の小学生との関わりを増やすことができることから意義のあることだと考える。ただし、小学校との交流はどうしても小学生が在校している時間の範囲で行う必要があるため、日程の調整に配慮する必要がある。

参加者の感想

子供たちがとてもかわいくて癒やされると同時に、たくさんの元気をもらえた気がします。この交流を通して、小学校の先生になりたい気持ちが



さらに高まってモチベーションがすごく上がりました。このような企画は準備が大変だとは思いますが、今後も色々な小学校と続けてくれるとうれしいです。



3 「教師の魅力再発見！」公開フォーラム

これまでに述べてきたような交流イベントを1年間通して開催することで、学生が教職への関心をさらに高め、「教師になる」という意識を持ち続けることができるよう支援を行ってきたが、授業があるために参加できなかつたり、オンライン開催の場合は、参加可能人数に限りがあるために参加できなかつたりすることがあり、学内全体に本プロジェクトを十分に浸透させることはまだ難しい状況にある。そこで、これまでの成果を報告し、改めて教師という仕事の魅力を考えてみる公開フォーラムを開催することとした。

具体的な内容としては、次の2点である。

- これまでに開催してきた交流イベントの様子を紹介する活動報告
- 教員の「養成」「採用」「研修」のそれぞれの立場からのパネルディスカッション

このフォーラムについては、広く参加を呼びかけるために、学内はもとより全国の教員養成系学部を有する大学にもオンラインでの参加を呼びかけ、12月25日（月）に開催し、学内外合わせて約150名の参加があった。

(1) プロジェクト活動報告

学生ボランティアによる活動報告を行った。プレゼンテーションの内容は、①プロジェクトのねらい②交流イベントの様子③成果と課題とし、その構成についても学生ボランティアのメンバーと話し合いながら決めていった。

特にプロジェクトのねらいについては、一学年380名以上の同じ目標を持った学生が同じ大学内で学んでいるのに、その目標について共有したり共感したりできる場が殆どないこと、そこで、クラスに枠を取り払って語り合うような場をつかっていこうとしているこの活動がこのプロジェクトの目的であることを示し、これまでの活動の様子をたくさんの写真を示しながら、その楽しさや有意義さをアピールした。



(2) パネルディスカッション

教員の「養成」「採用」「研修」それぞれのパネラー選考については、本学の学生にとって関わりが深い立場の人物とすることにした。

立場	所属	役職	氏名	選考理由
養成	附属小倉小学校	教諭	白濱太隆	3年生で実施される教育実習で毎年多くの実習生を教育実習担当として受け入れ、指導を行っており、その際の学生の成長の様子などを具体的に語るができる。
採用	福岡県教職員課	人事管理主事	中島正之	小学校教員からの現職であり、教員採用試験を統括しており、教員採用の現状や課題、今後の展望などについて語るができる。
研修	福岡教育事務所	指導主事	藤木悠介	小学校教員からの現職であり、若年教員研修（初任者研修）を担当している。1年目の教員の様子やその研修支援について具体的に語るができる。

フォーラムの開催に当たっては、福岡県教育委員会の後援を申請し了承を得た上で、それぞれの所属長及び本人に本フォーラムや本プロジェクトの趣旨説明を行い、参加の許諾を得ることができた。

実際のパネルディスカッションの展開は以下の通りである（ディスカッションの一部を概要として示す）。

■ 問題提起

- 新聞や雑誌に掲載された教師という仕事に関する見出しの紹介
「教師不足」「ブラック職場」「病休や離職の増加」「採用試験倍率低下」等
- 本学学生に聞いた「教師になることで心配なこと」
1位：保護者対応 2位：仕事量 3位：精神面
- 小学校教員採用試験倍率の推移
全国的に低い傾向、しかし新卒受験者は減っていない

■ 問題提起に対する感想

養成（白濱）

実習の始まりに「教師になりたいか」聞くと、半分は「絶対になりたい！」と答え、半分は「迷っている」と答える。この「迷っている」学生も「教師になるか教師以外を目指すか迷っている」学生と「報道やSNSで見る情報から教師になるのが不安だから迷っている」学生の二種類。

採用（中島）

マスコミはどうしてもセンセーショナルなニュースを報道しがち。先生のやりがいとかすばらしい先生の存在で救われたといったことはニュースになりにくい。学生の皆さんが教師の世界に飛び



込む前に、このようなニュースのフィルターにかかってあきらめてしまうことをすごく心配している。

研修（藤木）

初任者にアンケートをとると、「一番大変なことは何か」の回答で一番多いのは日々の授業づくり、2番目は研修を進めること。学生がイメージしている教師の世界と実際に働き出して感じることは違いがある。また、初任者には、指導教員が寄り添って伴走してくれるので、安心して日々の仕事に取り組むことができる。

■ 教師という仕事のやりがいや価値について

養成（白濱）

実習初日は表情が硬く緊張している。しかし3週間の実習で成長していく。精神面が大きく変わる。一生懸命授業をつくり、それに何とか子供たちが応えようとするを経験して、絆が深まっていく。この経験を通してはじめは迷っていた学生たちが「やっぱり先生になりたいです」といって大学に戻っていく。皆さんにも是非経験してほしい。



採用（中島）

子供の前に立って授業ができるのは教員免許を持つ者だけ。その資格を得ようとしていることは特別なこと。採用試験は、講師経験者もたくさん受験する。もし報道されているようなマイナスの面だけならば誰も受験しないはず。それを超える魅力があるからこそ毎年たくさんの講師経験者が受験しているし、その姿にやりがいや価値が表れているのではないか。



研修（藤木）

初任者がやりがいを感じる時はどんなときか尋ねたところ、子供や保護者から「ありがとう」といわれたときと、子供が「わかった」「できた」という姿を見たときという答えが多く返ってくる。このように、子供の成長に寄り添った結果が自分に返ってきてそれが自分自身の成長にもつながるところが、この仕事の一番のやりがいを感じるころではないか。



■ それでも不安を感じている学生は多いと思うが、「大丈夫。教師を目指していいんだよ。」というメッセージを

養成（白濱）

教育実習は、指導案作成や教具準備、板書計画作成、そして授業を3週間の中でやっていくので確かに大変だとは思う。しかし、これまで学内では話したこともない実習生同士がチームとなって、協力したり助け合ったりして実習を乗り切っていく。このチームワークの経験は教師になったときもきっと活かされる。実習を通して自信をつけ、本物の教師を目指してほしい。

採用（中島）

ワークライフバランスから考えると、デジタル化が進み、宿題や採点、成績管理などがずいぶん省力化され、その時間が子供と向き合う時間となってきている。コロナ禍を契機に働き方改革も速いペースで進んでいる。採用試験についても3年次のチャレンジ受験や試験日程を早めて合格発表を早くするなど様々な改革が進んでいる。安心して教師を目指してほしい。

研修（藤木）

子供の前に立つからには教師は学び続けなければならない。初任者研修のプログラムは、学校の実態に合わせて無理なく進められるようにつくられており、指導教員などのサポートを受けながら一人前の先生になることができるようになってきている。指導行政としても新たに教師の世界に飛び込んでこられる先生方を全力で支援していきたい。

■ ディスカッションのまとめ

- 教師という仕事に対しての一面的な風潮や風評に惑わされない
- これから子供と関わる経験を通して教師という仕事の価値を考えてほしい
- 専門職として学び続け、子供に向き合っていく強い意志と覚悟は必要

会場の多くは、初等教育教員養成課程の1年生や2年生であったため、3名のパネリストにも教育実習もまだ経験しておらず、採用試験や初任者研修のイメージも殆どない学生たちという前提でお話をしてほしいということを伝えていた。このため、詳しく踏み込んだディスカッションはできなかったが、社会の風潮から漠然と感じている教師になることへの不安を少しでも解消し、前向きに教師を目指すことへの支援とすることはできたのではないかと考える。



参加者の感想

- ・ 私は小学校の教員になりたいと強く思い、この大学に静岡からやってきましたが、やはり昨今の授業教育に関するマイナスなニュースなどから教員になることを躊躇っている最中でした。今日のフォーラムはそんな私の教員になりたいという思いをすごく後押ししてくれるものでした。本当に楽しかったです。
- ・ 養成、採用、研修の立場から様々な話を聞くことができとても勉強になりました。実際、不安に思うところはたくさんありますが、経験されたり実際に関わったりしていらっしゃる先生方が魅力的に感じられている教師の世界を目指したいなど実感するディスカッションでした。参加して良かったです。
- ・ 私はドラマの影響でずっと助産師になりたいと思っていましたが、中学校での数学の先生との出会いをきっかけに教員という仕事の良さに気づくことができ、そこから教員になりたいという思いが自分の中で大きくなってきました。しかし、中学校の先生と進路の面談をしている時に

「教員はブラックだからね～」的なことを言われ、一気に将来が不安になった記憶があります。先生がそう言っているのだから本当に教員の世界は厳しく、私には耐えることが出来ないのかなと。その後、高校に進学して高1の時の担任の先生からも「教員はメンタルが強くないといけなから、今のままだと心配だよ。」と言われ、教員を目指すことを諦めてしまおうかなと何度も思いました。高校1年生で言われたけど、なんだかんだ高校3年生の共通テスト直前の三者面談まで、「将来教員になりたい」ということを貫きました。今日のフォーラムに参加して、私自身の教師になることを諦めなかった、それほど教職に対する気持ちが強いことに気づきました。これからは絶対何を言われても教員になるんだという気持ちで頑張ろうと思いました。

4 学生ボランティアの活動

本プロジェクトでは、学生ボランティアの協力や活躍も欠かせないものとなった。はじめは交流イベントの参加者に本プロジェクトの活動への参加を呼びかけ、さらに本学のボランティア登録システムでも呼びかけることで、10名の学生が参加することとなった。

活動の内容は以下の通りである。

(1) 交流イベントの企画

交流イベントを開催する度に、内容や進行の仕方などについての反省を行い、その反省をもとに「今度はこんな交流イベントをやりたい」というアイデアを出し合った。そしてその内容が本プロジェクトの趣旨に合っているか、実現可能かどうかなどについて検討を行い、実現に向けて担当職員が連絡調整を行った。

(2) 交流イベントの告知

交流イベントの内容や開催日時が決まったら、ポスターや告知動画を作成し、学内に掲示したり、SNSで参加を呼びかけたりするなどして参加者を募った。

参加申込みについては、Google Formsを活用して事前に把握し、参加歓迎のメールを送付するなどして申し込んだ学生が安心して参加できるよう配慮した。

(3) 当日に向けた準備

参加者同士は殆ど初対面であることを考慮し、どのように和やかな雰囲気にするか、どのような話題で進行するかなど進行内容について検討し、必要な道具類の作成や準備を行った。また、交流の様子はSNSで後日紹介するため、参加者への個人情報に関する確認文書を準備した。

(4) 当日の進行

はじめはプロジェクトの大学職員が進行していたが、徐々にボランティアによる進行にしていった。参加する学生にとっても、同じ福岡教育大学生が進めることで、安心して自分自身のことを語ることができる等のメリットがあった。



(5) SNSによる情報発信

本プロジェクトの活動の様子については、X（旧 Twitter）や Instagram による紹介を継続して行っている。X については担当職員が情報発信を行っているが、Instagram については、職員の確認の上でボランティアによる発信を行っている。その際に交流イベントの様子を紹介する動画も、当日の録画データを編集することで作成し公開している。

X（旧 Twitter）：https://twitter.com/naru_esteacher

Instagram：https://www.instagram.com/naru_esteacher/

(6) 公開フォーラムでの活動報告発表

12月の公開フォーラムでの活動報告については、ボランティアによる発表を行った。当日のスピーチ原稿やプレゼンテーション資料もボランティアが構想し、担当職員が修正をしながら仕上げた。

5 「教師の魅力再発見！」ショートムービー集

教師の仕事の魅力を学生が少しでも実感できるように、様々な交流イベントを実施してきたが、その中でも実際に学校教育現場で日々子供たちと向き合っている現職の教師の姿に触れることは重要だと考える。しかし、大学生活の中では、教育実習や自らボランティア等で学校に出向かなければ、なかなか教師の仕事を目にすることは少ない。本プロジェクトの交流イベントでも本学を卒業した1年目の教員との交流イベントを行ったが、各教員が所属する小学校と学生の授業時間との間での日程調整が難しく、結局1回しか実施できなかった。

そこで、学生に教師の仕事の魅力を発信し、学生がいつでも気軽に視聴することができるようにするために、現職の教師が語る教師の魅力のインタビュー動画を作成し、リーフレットとして配布することとした。

インタビューを実施する教師は、学生に親近感を持たせるため、できるだけ近い年齢で本学出身の1～4年目の教員とすることにした。人選については、本学キャリア支援室や福岡教育事務所からの推薦を参考に15名の教員を選出し、依頼文を作成した上で各学校長および本人に趣旨を説明し、協力を仰いだ。また、これ以外にも本学附属小学校の教育実習担当の教員、さらに12月に実施した公開フォーラムのパネルディスカッションで語られた「養成」「採用」「研修」の立場からの教師の魅力についても取り入れ、計25本の動画を作成した。

各動画は学生が気軽に視聴できるように1～2分程度に編集を行い、動画のアドレスを知っている者のみが視聴できる YouTube の限定公開を利用した。また、リーフレットには、二次元バーコードも合わせて掲載し、スマートフォンで容易に視聴できるよう配慮した。



完成したリーフレットについては、年度末年度初めに1～4年生の初等教育教員養成課程約1500名全員に配布することとしている。

小学校で担任として日々子供たちと過ごしている先生たち、教師を目指す学生を支援している様々な人々など、それぞれの立場から考える「教師の魅力」は様々。小学校の先生のやりがいや本物の先生たちはどのように考えているのか気になったとき、教師を目指すかどうか迷ったときなど、ちょっとのぞいてみませんか？きっと新しい発見がありますよ！

視聴するには、二次元コードを読み取るか、<https://youtu.be/>に二次元コードの下のアドレスを入力して下さい。なお、ここに紹介している動画は、本企画の趣旨を理解の上、学生の皆さんのために協力して下さいました先生方のおかげで完成しました。動画の二次元コードやURLの二次配布はしないようにして下さい。また、動画視聴可能期間は、令和6年8月末までの予定です。

教師の魅力再発見！



YouTubeショートムービー集



「みんながいてくれないと、私がここにいる意味がない」と子供たちに語りかける友重先生。さて、その意味は？教師になって4年目となり、愛着したことを語ってくれます。



立花山の中継にある各学年単年度の小学校で2年目を過ごす先生です。子供が自分で学びはじめ、手応えを感じてくれたとき、教師という仕事は大変だけれど、喜びを感じると語っていました。



できなかったことが少しずつできるようになっていく我が子の成長を感じる喜びを例に、それを職場でも感じる事ができるところが、教師という仕事ならではの魅力だと伝えてくれました。



子供たちが学校生活の中で感じる喜びや悲しみや達成感などを同じ瞬間に共有できるところに、この仕事のすばらしさを感じるそうです。これは教師の特性かもしれません。



生活科担当として低学年の担任をすることが多い伊藤先生。子供たちの反応や成長を間近で見、自己肯定感を高められるところにやりがいを感じていらっしゃるようです。



日々子供たちから新しい刺激を受け、子供の一番の色々考えさせられることがあるそうです。教師としてだけでなくとして成長させてもらえることが「教師の魅力」だと語ってくれました。



今、指導していることは、子供たちの10年後20年後に同じくその成果が出てくる。この醍醐味を是非みなさんに味わってほしいという仕事の意義を伝えてくれるお話です。



特別支援学校の交流学級担任として子供と関わる中で経験した感動的な体験を語ってくれました。きついなこともあるけれど、こんな喜びを味わうことができるから、教師という仕事はやめられないようです。



令和5年3月に福祉大を卒業した1年目の先生。夏休みにお盆を間に行きました。ほほほうまくいかないことが多かったようですが、結構強く関わっていただくことで感じた手応えがあったようです！



福岡市の1年目の先生です。普段おとなしくあまり話しかけてこない子供が、「先生あね」と私に話しかけて来てくれたとき、教師の醍醐味を感じるそうです。



令和5年3月に福祉大を卒業した1年目の先生。低学年ならではのかわいいエピソードも交えながら、教師という仕事の喜びを語ってくれました。



研究生生として活躍する12年目の先生です。Zoomで教室とつながる、クラスの子供たちの前で、子供たちの成長の具体的な姿を挙げるなか、教師の魅力が学生に語りかけてくれました。

皆さんがお世話になる福岡教育大学附属小学校の教育実習担当の先生や、福岡県の教員採用試験を担当している方と交流したときのお話も一部紹介します！



仕事としての現実的なところと教師としての夢のあるところから「教師の魅力」を語っていただきました。子供と毎日ドミナマのような日々を過ごすことができる教師ならではのお話が聞けました。



子供の成長に関わることができるとはもちろん、人として自分自身が成長し続けることのできるのが教師という仕事であり、3月、子供と一緒に1年間を振り返る醍醐味がやりがいのようです。



「自分を認めてくれる大人になってあげたい」という思いから教師になって2年目。「こんな感懐になれるのは、子供と長い時間一緒にいられる教師ならでは」と語る三吉先生。さてどんな感懐なのでしょう？



学生の時から小学校でボランティアをしていた2年目の先生。ボランティアではわからない、担任になって初めて実感できる「教師の魅力」があるそうですよ！



採用試験を要したが、教員を採用する立場から見た「教師の魅力」を語っていただきました。卒業すれば手に入る教員免許。その意味や重みを改めて考えさせられるお話です。



「プロである限り、研修は必要」と皆さんへ伝えます。その一方で、「1年目の不安な気持ちになるころを、周りの先生方や研修が全面的にバックアップしてくれることについて優しく語っていただけました。

令和5年12月25日開催
「教師の魅力再発見！」
公開フォーラムから



※各動画のアドレスについては、学生への限定公開としているため、ここでは非公開としている

Ⅲ 本調査研究の総括と今後の展望

1 取組の成果

(1) 教員養成の在り方について新たな一面を提起できた

昨今の小学校教員採用に関する課題に対しての1つのアプローチとして、学生の入学時からの教職に対する主体的な意欲や向上心を持ち続けることが重要であるという仮説を、プロジェクトを通して提起することができたと考えます。

これまでの教員養成は、カリキュラムに則った日々の授業や教育実習を経れば、教員免許が取得できるとともに“前向きに頑張ることが出来る”教師を輩出できるという前提で養成を行ってきた。しかし現状は、学生を取り巻く多くの「教師という仕事」に対するネガティブな情報による不安の増大や、学生同士の教師を目指すことについてのコミュニケーションの希薄化など、日々の大学生活では十分に「自分は教師を目指すんだ」「自分は教師としてやっていくんだ」という主体性や覚悟を持つ環境を作れていないという課題がある。

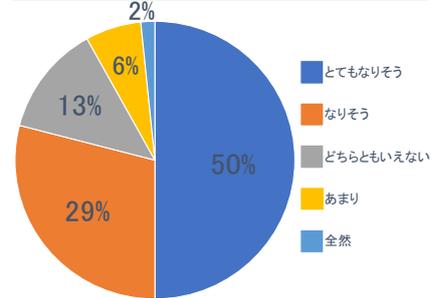
このような課題に対し、本プロジェクトに年間を通して継続して取り組んだことは、その下支えとなる期待感、連帯感、目標の共有、共感、安心感といった情操面を刺激、醸成することにつながったと考える。

(2) プロジェクト参加者の教師を目指す意識向上が見られた

まず本プロジェクトで実施してきた様々な交流イベント後のアンケート結果を見ると、約 85%の学生が交流イベントに肯定的な回答をしており、これらの企画が好評であったことがわかる。また、クラスの枠を超えて同じ目標を持つ者同士の交流を実現するというねらいについても、約 80%の学生が肯定的な回答をしており、交流イベントが学生同士のつながりをつくる一つの機会となっていることがわかる。

また、これまで記述してきた参加者の「同じ夢を持つ人とお話して改めて教師の素晴らしさを感じ、自分も頑張ろうという思いが強くなりました。」「小学校の先生になりたい気持ちがさらに高まってモチベーションがすごく上がりました。」といった感想からもわかるように、交流イベントを実施してきたことが、教師を目指す意識向上に寄与しているといえる。

交流イベントに参加したことが、知り合いを増やすきっかけになりそうですか？



(3) 学外との様々なコラボレーションを実現できた

昨年度（令和4年度）途中から始めた本プロジェクトは、当初学内のクラスの枠を超えた交流イベントを中心に行っていたが、本年度は、学校教育に関わる学外の人々と交流を図ることで刺激を受け、改めて教師を目指す意欲を高めることをねらいに多くの交流イベントを実施することができた。

交流の相手	回数・人数等
附属小学校の教育実習担当者	3回（6名）
教員採用試験担当者	1回（2名）
本学を卒業した1年目の教員	1回（3名）
小学校教員を目指す他大学の学生	3大学
教育大進学に関心のある高校生	5校
山間部の小学生	1校

これらの交流は、前述の参加者の感想から、改めて自分が教師を志したきっかけを振り返ったり、今の自分自身の教師を目指す思いを確認したりすることにつながる機会となるとともに、今後の教師に向けた学生生活をより充実したものにしていこうという意欲の向上にもつなげることができたと考ええる。

(4) 本プロジェクトの学生への認知度を高めることができた

これまでにないプロジェクトを実施していくにあたっては、まずは学生に対する認知度を高める必要がある。そのために、交流イベントの学内掲示やX（旧 Twitter）や Instagram の活用、学食内での交流イベントの様子についての動画放映、大学の広報誌への掲載、学内ポータルでの参加の呼びかけ、新聞やテレビ取材への協力などを行ってきた。しかし、当初は学生にとっても「どんなことをやっているのかよくわからない団体」のように見えていたり、できるだけ多くの学生が、授業が空き時間となっている時間を選んで交流イベントを開催しているため、学生にとっての優先順位が低かったりしてなかなか参加者が集まらないこともあった。

しかし、本年度は特に学外との交流を充実させ、年間を通じて継続的に交流イベントを展開することができたため、学生にとっても目新しさがあつたようで、徐々に参加者数も増え、これまでに 119 名（R4 年度 10.6%→R5 年度 15.7%に上昇）の学生が参加しており、少しずつではあるが、本プロジェ

クトの認知度は高まってきていると考える。このことは、次年度以降も本プロジェクトを継続していく上で有効であると考ええる。

2 取組の課題

(1) 学生にとってもっと参加しやすいプロジェクトにしていく

本年度は、本プロジェクトを本学に浸透させ、本学学生の認知度を高めるために、学外との交流イベント（特別企画交流イベント）を多く企画、実施してきた。その成果は前述のように徐々に表れてきているが、オンラインでの開催が中心となるため、参加人数が限られたり、発言の回数が限られたりする傾向が見られた。また、学外との交流を実施するにあたっては、趣旨説明や事前の打合わせ、通信環境の確認など事前の準備が必要となり、このため、対面で行っていた学内の定例交流イベントをあまり実施することができなかった。

本プロジェクトの目的の一つに、小学校の教員を目指すという同じ目標があるのに、クラスが異なると殆ど知り合う機会がない各学年約380名の初等教育教員養成課程の学生が、クラスの枠を超えて交流できる機会を提供していくというものがある。今後は、学内定例交流イベントを日常化させ、誰もが気軽に参加でき、交流を活発化させていくことが必要である。そのためには、学生ボランティアによる自主的な活動も必要になってくると考える。

(2) 学内での体制整備

本プロジェクトについては、本学教育総合研究所が主管となって運営を行ってきた。少しずつ認知度が上がってきている今、本学教員の授業との連携や学内各課との連携を充実させていくことが、本プロジェクトを発展させていけるか否かのポイントとなると思う。

大学教員の授業との連携については、本年度もいくつかの授業において、プロジェクト担当者が本プロジェクトの趣旨を説明したり交流イベントへの参加を呼びかけたりする場を設定させてもらった。今後は、本プロジェクトの趣旨を大学教員に周知し、大学教員自らが学生に対して、将来教員を目指す上で本プロジェクトが役に立つことを説明し、参加を促すよう働きかけていくように協力を仰いでいきたい。

学内各課との連携については、経営政策課による学内外への広報活動、学生支援課による学生への参加推奨、教育支援課による交流イベントの日程調整や会場準備、キャリア支援室による教員採用関係の情報提供など横のつながりの充実を図っていく。

以上のように、全学が一体となって、学生が「自分は教師になるんだ」という意識を日常的、継続的に向上させる風土を培っていくことが必要である。

(3) 評価方法の検討

本プロジェクトのゴールは、このプロジェクトに4年間参加し続けた学生が、「自分は小学校の教師としてやっていく」というアイデンティティを確立するするとともに、その様な学生が多くなり、全学的に教職に向かう意欲が向上していく雰囲気を作り出すこと、さらには、その効果が、実際に教師となって学校現場で働きだして、授業づくりや学級経営などにはつらつと取り組む姿として表れることである。このため、今現在の様々な取組そのものの短期的な評価だけでは、効果や成果は十分に見取することは難しい。

そこで、この目的がどの程度達成できたのか、あるいはできなかったのかを、本プロジェクトに参加した学生が教師となって働き出したあとも追跡調査を行うなど、将来的に見取る評価の在り方を検討していく必要がある。

3 今後の展望

本年度は、本プロジェクトの立ち上げ段階ということで、学生数が最も多い課程であり、教員採用試験の倍率低下が顕著である小学校に焦点を当てるため、初等教育教員養成課程を対象に、さらに1，2年生のみに絞って様々な取組を行ってきた。今後は、これまでの経験を活かしながら、中学校や特別支援学校の教員を目指す学生、また学年も全学年に広げて推進し、大学全体で教職に就くことについて語り合う雰囲気醸成し、1人1人の学生の「私は教師になる」という主体的な意識を継続的に高めていきたい。そして、このことが将来的に学校教育現場の活性化、充実につながることを願っている。

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、国立大学法人福岡教育大学が実施した令和5年度「教師の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。